
ころんで、ころんで、ころぶ。

はしお わたる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ころんで、ころんで、ころぶ。

【Nコード】

N2616R

【作者名】

はしお わたる

【あらすじ】

ころころ転ぶ。

でもそれってつまり、あなたをすきなころのぶんだけ！

ご紹介しよう

こちら、ついさっきいったい何に躓いたのか地球に熱烈スライディングを両手掲げてプレゼントして差し上げた幼馴染、山吹さくらさん、御歳17才。せぶんていーん。

花も移ろう、違った、花も恥らう麗しのじよしこーせーである。

「・・・普通に転んだって言って」

「気を遣ってやったんだよ。今時マンガでだってそうそう見ない綺麗なこけ方だったから」

すんばらしく、はずかしいだろう。どうよ。

「すんばらしく、はずかしいです」

「だな」

それつきり動かない山吹さくらさん、せぶんていーん。

リョウタはおーいと声をかける。

おーい、轆かれた蛙みたいにいっまでも公共の道路に転がってんな

「ご通行中の皆様に多大なるご迷惑だぞ」

もっともご通行中の人がいたら山吹さくらさんは転んだ瞬間かのポルトさんもびっくりな瞬発力で健気に健やかに立ち上がって疾風の韋駄天よろしく駆け出すだろうから、つまり何が言いたいのかという、幸い只今のこの公共道路にはこの二人しかいませんよという

こと。

それでもこけるといふのは恥ずかしい。それは小学生の頃から皆そう。

膝小僧は痛いし、心も痛い。それはちっさいころから皆そう。

なんでだろうなあとか考える心の余裕が逆に出てきたさくらさん。ちなみに絶賛我らが偉大なる青い宝石その名は地球と熱烈抱擁は継続中。

立っているリヨウタから見える後頭部の裏側からそこはかたなく、うう、地球にきつすをしてみたよ、とアスファルトにぶつかってはリヨウタの耳にそんな声が届くから

「おい、大丈夫か、日本の夜明けは近いぞ」

ちょっと優しくなったりリヨウタの声。

さくらさんは内心してやったり、反面ああコノヤロウめ。

自分の両手に力を入れて、さらば地球よ旅立つふねは！

「大和リヨウタ、くん、は、フェミニストって言葉を、習得すべき、だと思っ」

立ち上がってプリーツスカートを片手でぱっぱ払いながらリズムカ
ルに文句を垂れる。

一方立ったままそれを見ていたリヨウタ。両手は投げやりに制服の
ズボンのポケットに突っ込んでいた。

それをちらりと横目にさくらさんはああコノヤロウめと内心罵倒垂
れる。

そうね、そうそう。ワタシたちそういう関係。

つまり、一応女の子のさくらさんがこけても紳士的に手を貸したりだなんてしない関係。

知ってたけどさとさくらさんがちょっと泣きそうなのはリョウウタが他の女の子ならさっと手を出して大丈夫かとさり気無くいやらしくなくてできてしまう実は紳士で優しい男の子だから。ぜんぶそのせい。

「山吹さくらさん、は、もっと、色気のあるこけかたを、習得すべき、だと思っ」

まあ、人の気も知らないでにくつたらしいこと！

なんてひと睨みだけで押し隠して、さくらさんは歩き始める。

もうね、こついうのお手の物なの私。なんて心で溜め息。

あのね、知ってる？お隣韓国では溜め息すると天井落ちるぞって言う人がいるんだって。幸せ逃げるぞってかんじにね。

私の溜め息の数の分、あんたの頭に天上が落っこちればいいのに。
・・・だめ、やっぱり、だめ。あんたが怪我するなんて、どう考え
ても、ムリ。だめ。

なんて頭で悶々。

その後ろを、すぐに追いつくりョウウタ。これもまたにくつたらしいさくらさん。

色気のあるこけ方ってなんぞ？

さあねえ。パンチラとかかしら

不健全。

まったく健全な高校生男子のほうで、不健全だぞ

こんなかんじのくっだらな会話を繰り返しつつ、とてとて二人で歩いていく歩道橋の上。

さくらさんは知っている。

歩道橋のこちら側にお家があるリョウタくんが自分と帰るときはわざわざこの歩道橋を一緒に渡る理由。向こう側のさくらさんのお家の前まで一緒に歩いてくる理由。

こっちのコンビニに用があるからって、ほとんど毎日こっちのコンビニに何をしに行くって言うのアナタ。

それでもこけた時は手を貸したりしない、そういう関係。

「・・・いたい」

突然立ち止まって俯いて、ぽつりと眩き零したさくらさん、に慌てて足を止めて顔を覗き込むリョウタの顔にまたたまらなくなっただけと涙零したさくらさん。

「どい、どい痛い？」

しゃがみこんで聞いてくるリョウタにしようもないので、ひざごぞう、と眩くさくらさんはもう、なんだか自分が情けないやら意気地

がないやら。

ひぎこぞう、呟きつつリヨウタは確かめてみるけれど、ちょっと赤くなっているだけで別に血が出ているわけではないのでほっとする。

「なんだよお、おどろかすなよお」

「だって、いたいものは、いたい」

「そんなに痛い？」

「・・・そうでもない」

なーんーだーよーおー

と力ないリヨウタの叫びが薄紫の空に消えていく、歩道橋の上。

リヨウタ、リヨウタ、

迷子みたいに繰り返すさくらさんに、リヨウタは眉根を下げて、しやがみこんで、ん？と聞いてやる。

ん？

それを瞳に写したさくらさんはもう、ああもうコノヤロウめこのやろう！と何度も何度も心の中は花も桜も散りゆく嵐。

「リヨウタ、おんぶ」

「おんぶうー？」

高校生にもなっておんぶ？おーいさくらさーん。せぶんでいーんのさくらさーん。

茶化してみても、さくらさんは俯いたまま、おんぶ、と頷く。
どうしたの、いつもみたいに怒らないの、そんなに痛い、大丈夫
なの、と混乱のなかりヨウタは背中を向けてさくらさんの前に片膝
着いた。

「ほら、さくら、おんぶ」

だから泣くな、なくな。と語る背中に、おつかしいなあ昔は、こ
んなに背中が大きくなかった昔は、私がリヨウタになくなくな頭を
撫でてあげていたのに。

あれこれそれやっぱりあれ、とぐるぐるした頭のなかを経て、さく
らさんはもう、いいや。もう、いいや！って柄にもなくなんだか全
部どうでもよくなってしまった。

だって歩道橋の上の空は、もう星だって目立ち始めた。

あれがでねぶー

でぶねー？

ちがうでえねえぶう

デブねえ

リヨウタばかり

なんて夜道を片手つないで歩いた記憶が頭を過ぎれば、自然と心は
穏やかになる。

これは、ぜったい、わたしのもの。

そう思えば、さくらさんはせぶんていーんのさくらさんに簡単に戻ってこれた。

これって、もちろん、せぶんていーんのこの大きな背中の中の彼じゃなく、ちっこい彼とのやさしい思い出のこと。

どんつと両手で、待っていた背中を押すと、おいこらさくら!と思いでよりずつと低くなった声がする。

せぶんていーんのリヨウタくん。

「もついいよ」

おんぶやっぱりもついいよありがとう

青春だあと大声で浜辺で沈む夕日に叫んでみる心の中な笑顔のさくらさんに、ありがとうなんていわれたら満足な文句も言えなくなつて、しつかたないなあとリヨウタは溜め息。

さくらさん、それ、開き直りっていうのよなんて教えてくれる人は誰もいないから、さくらさんは心がなんと清々しいこと。

きつとさっきのリヨウタの溜め息のせいで天上が私の頭上に落つちたんだ。それで私、ちよつとおかしくなちゃったんだよ。だからあんなこといったのよ、ってそれは後に語ったさくらさんの談。

だから普段は絶対言わないようなことも言えてしまったんだなあ。

「リヨウタ、おんぶはいいから、手繋いで」

「てえ?」

「手」

繋いで、と差し出された右手にどうしたのおまえ、やっぱりこけたのまずかった？と言ってみるも、なんだか最近稀に見る幼馴染の晴れやかな顔に折れてしまうのがリヨウタくん。

左手で握って、そのままずんずん歩く。

それを、ぽっぽっぽっぽと母親に手を引かれるように半歩後れて着いていくさくらさんは、ああやっぱりなあと確信。

いつも帰り道、並んで歩くリヨウタはやっぱり自分の歩幅にわざと合わせていてくれたんだなあ。

やさしいリヨウタくん。

でも、それじゃあ、いやなんだなあ、さくらさんは

せぶんていーんのさくらさんは。

「リヨウター」

「んー」

「あれ、シリウス」

「んー」

指を空に高く指して静かに声を上げるさくらさんと、その半歩前で手を引いてあげるリヨウタくん。

なっがい歩道橋の半分くらいを、ふたりでとつとつ。

二つ分の、空気に溶けていく白い息。

「あれが、ベテルギウス」

「・・・」

「ぶろ、ぶろ」

「プロキオン」

地球の次は宇宙ですかさくらさん

そう笑うリヨウタに、ぷろきおんなんていつ覚えたのリヨウタと本
当に不思議そうなさくらさん。

「時は流れるものだよさくら」
「・・・そうだね」

そうだねえ。それはそうだ。

時は流れていくもので、人は変わっていくものだ

うん。そうだ。

「ポルツクスカストル、カペラ、」
アルデバラン、リゲル。

低い声で歌うようにそついう背中にかさくらは目をぱちぱち。

「なあに、その呪文」

「これに、さくらがいった大三角を足すと、冬のダイヤモンド」
「ふゆのだいあ몬드」

あなた、かしこくなったのねえ

呟いたさくらさんは、

賢くなったよ。あれもほんとはずうっと前から覚えてた。アルタイ
ル、ベガ、

「デネブ」

と先を歩く大きな背中に、もう、もう、と涙をまた落つことしそうになったから空を見上げて、見上げて見上げて。それに気づいたリヨウタがちゃんと握っていた手を軽く引いて

「地球にきつすはできても宇宙にきつすは無理ですよー」
またこけるといけないから、ちゃんと足元見てなさい。

とまた背中を向けて、人の気も知らないで今度はちよつとゆつくり歩いてくれるから、さくらさんはばっか。このばあか！しかたない青春だあと心で大絶叫、それから本当に小さくちいっさく呟いた。

「わたしは地球より宇宙より、リヨウタくんにきつすがしたいなあ」

がっど大きな音を立てて大袈裟なんじゃないのというくらいぐらつと躓いた前に行く背中に、してやったりとさくらさんは、もっと色気のあるこけ方を覚えたらいいんじゃないかなと言葉を投げて、それでも、放されなかった右手と左手を見ていた。

(後書き)

ころころ転ぶのが女心

確かお題が「転ぶ」でした。ひとこと言わせてください。

「タイトルセンスが来い！」

・・・いいタイトルありませんか。名付け親になってやってもいいのよって方いらっしやいませんか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2616r/>

ころんで、ころんで、ころぶ。

2011年10月8日19時46分発行